

「錦乃原桜草」の経緯

錦乃原桜草保存会長 中嶋貞雄

郷土埼玉の県花として多くの人に親しまれている桜草は、荒川の清き流れと共に私達県民の誇りであり、シンボルであります。そしてこの可憐な花を愛育する者は同志であります。共に、これに関する知識を分かち合い、切磋琢磨して、この愛すべき桜草のより良き理解者、礼讃者でありたいと希って居ります。

県下に昔からある桜草自生地の一つに数えられていた「錦乃原」は、大宮市西端(旧馬宮村)荒川畔の原野一帯に群生して居りました。大正、昭和初期にはごく近隣の村人が農作業の合間にこの原を訪れては花を眺め、ひと時の心の安らぎにしていたようであります。

昭和八年五月、文部省嘱託三好學博士がこの広大な原を実地検分され、その美しさに景観日本一の折紙をつけられたのを契機に、地元有志がこの原の真価を村の新名所として広く世間に紹介しようと謀り、急遽、時の文豪東京日日新聞社實徳富蘇峰氏夫妻を招聘し、一日この原に案内して遊んで頂いたところ、丁度、咲き競う桜草の薄紅色と野ウルシの黄、草の緑が宛ら錦を織りなしたように美しい景色に夫妻は痛く感動されて、即座にこの一帯を「錦乃原」と命名し、案内者永田二郎氏(画家)の邸宅にて色紙に書き残して帰られました。

この「錦乃原」の命名を機に永田二郎氏を会長に頂き桜草保存会が結成され天然記念物の指定を受けるための運動を起し、桜草の保存、保護活動に当りました。翌九年三月一日付で国の天然記念物に指定され、翌十年四月には錦乃原の中央部に「天然記念物馬宮村桜草自生地」の高さ約四米の記念碑を建て、花の時季には青年団が原の管理に当たり、錦乃原は急速に花見客で賑わうようになりました。当時の新聞には「約五町歩の一面の桜草は目下二分咲き」「春うらら、桜草が咲き競い、都人を待つ馬宮の錦乃原」と云った記事が紙面を賑わし、現地には舞台が作られ、東京音頭や八木節などが終日踊られ、原に通ずる田圃道には花見客相手のよしず張りの露店も並び、全盛期には「賑わった錦乃原、人出三千人」と大々的に報道されています。

昭和十二年頃より戦時色が濃くなるにつれ、人々の気持ちも花を賞でるところではなくなり訪れる人も少なく、次第に錦乃原は桜草のみが淋しく咲く原となり、昭和十七、八年、食糧増産の掛声に開墾の鎌が振はれ始めました。

終戦後昭和二十二年頃を最後に錦乃原一帯は美田と化し、食糧危機克服に貢献はしたが桜草は消滅してしまいました。この事を惜しんだ村人は錦乃原の桜草を各家に持ち帰り屋敷内に植えて、大切に守り育てられて来ました。

昭和三十七年頃には桜草の夢よもう一度と永田二郎氏を中心に有志にて再度桜草保存会が結成されましたが、栽植地の確保が出来ないまま記念碑の建て直しだけに終わりました。馬宮のシンボル、大宮市の誇りである錦乃原種桜草を後世に伝えることは住民の私達の務めであると、馬宮公民館では平成二年より館長を中心に地域内の桜草栽培実態調査を続けた所、五十数戸の農家の庭に愛育され続けていることが判明、増殖を奨励すると共に「桜草の育て方講座」を開いたり、展示会やシンポジウム開催等多彩な桜草関連の行事を繰り広げ、多くの地域の人達の参加を得て、桜草への関心を深めることが出来ました。

平成六年、緑と花のゆとりある町作りを提唱された新藤享弘大宮市長の胆入りで新治水橋のたもとに約一町歩余の桜草自生地用地が供与され、「錦乃原桜草園」と命名されました。

同年六月十二日、永田庄一氏を初代会長に戴き「錦乃原桜草保存会」が三度目の正直と盛況裡に結成されました。発会満五年を迎えた現在、会長を芯として会員六百五十名を擁し、大宮市役所文化財課の指導の元、各種企業団体の心温まる御後援を頂き乍ら「錦乃原桜草園」の完成に向け、その増殖、管理に環境整備に懸命の努力を致して居ります。

かつて「錦乃原の桜草」が天然記念物花の楽園として名声を博したように、再び大宮市の花と緑の拠点作りに貢献出来るよう、また県花としての桜草の普及に努めて行きたいと存じて居ります。

